

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

日本看護学会論文集:小児看護(2008.02) 38号:278~280.

小児の救急外来受診と病児の親の不安傾向 A市立総合病院における受診動向からの分析

細野恵子, 常本典恵, 松本昭子

小児の救急外来受診と病児の親の不安傾向 —— A 市立総合病院における受診動向からの分析 ——

細野恵子¹⁾・常本典恵²⁾・松本昭子²⁾

key word : 小児, 救急外来, 発熱, 親の不安, 受診動向

はじめに

わが国における少子化への意識化は1989年の“1.57ショック(合計特殊出生率)”を契機とし、以降低下の一途を辿り2005年には過去最低の1.25を記録した。一方、救急外来を受診する患者年齢層の小児の占める割合は高いといわれている^{1),2)}。この背景には核家族化とそれに伴う育児経験の希薄や育児知識の不足、それに伴う看護能力の低さ、共働きによる時間内受診の困難さなどが挙げられる^{3),4)}。このような状況から病児の親の心理は不安傾向に傾き、夜間帯は一層その傾向を強めていると思われる。その結果、小児の救急外来受診者の多くは1次救急レベルあるいは時間外診療目的⁵⁾であることが多く、小児救急医療の課題となっている。

I. 目的

本研究では、小児の救急外来受診件数と患児の症状や重症度を明らかにし、時間外受診の目的と病気の子どもをもつ親の不安傾向を検討する。

II. 研究方法

1. 調査対象の特性

A市は人口約31,500人、世帯数約14,500件規模の街で、北海道北上川北部に位置する。A市立総合病院(以下、A病院とする)は全病床数469床、うち小児科病床数は20床で、道北北部地域における基幹病院として機能する。

A病院救急外来は土・日・祭日の日中および夜間に診療が行われており、救急外来を受診した小児科の患者は全科当番医の診察を受けている。

2. 調査内容

本研究では、A病院の救急外来を受診する病児とその保護者を対象に、2006年度の受診件数および受診内容を調査した。具体的には救急外来記録などをもとに、1年間の受診件数・患児の年齢・主訴・症状・重症度などを調べた。重症度の区分は、内服薬の処方程度のものを軽症、点滴や検査などを必要としたものを中等症、入院加療を要したものを重症とした。今回の分類では軽症、中等症がいわゆる1次医療、重症が2

次医療に相当する。

3. 分析方法

データの分析は、単純集計によるデータ間の比較を行った。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、対象施設の所属長に研究の主旨と内容を説明し、記録内容や個人が特定されることのないよう配慮したデータ処理を行うこととして承諾を得た。

III. 結果

A病院の2006年度全科の外来延べ受診者数は253,297名、そのうち小児科受診者数は26,994名で全体の10.7%に相当した(図1)。これに対して救急外来受診者数は11,755名、そのうち小児科受診者数は3,422名で全体の29.1%に相当した(図2)。

小児の月別救急外来受診者数は2006年4月330名、5月429名、6月279名、7月261名、8月174名、9月225名、10月228名、11月308名、12月371名、2007年1月271名、2月194名、3月352名であった(図3)。

2006年度における小児の救急外来月平均受診者数は285±76(mean±SD)名で、それより多い月は4月、5月、11月、12月、3月の5ヶ月間で呼吸器疾患患者の受診割合の多い月であった。

重症度別分類では内服薬の処方程度の軽症が2,623名76.7%、点滴や検査等を必要とする中等症が511名14.9%、入院加療

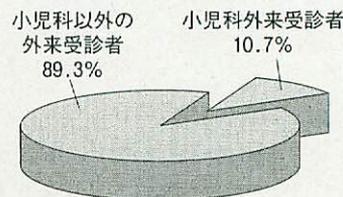


図1 全科外来受診者における小児科受診者の割合

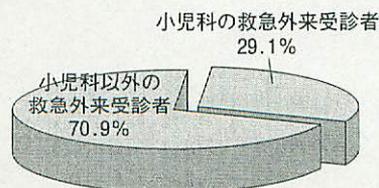


図2 救急外来全受診者における小児科受診者の割合

1) 名寄市立大学保健福祉学部看護学科 2) 名寄市立総合病院

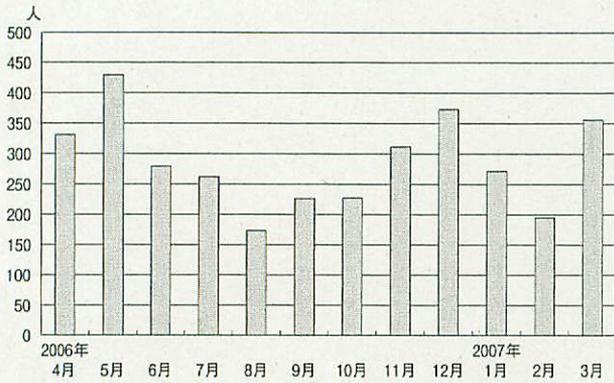


図3 小児の月別救急外来受診者数

を要する重症が288名8.4%という内訳であった(図4)。

症状別分類では発熱1,582名46.2%, 呼吸器症状768名22.4%, 消化器症状706名20.6%, 皮膚症状163名4.8%, けいれん46名1.3%, 誤飲14名0.4%, その他143名4.2%という内訳であった(図5)。受診者の主訴は発熱症状が最も多く、次いで呼吸器症状、消化器症状の順となっており、受診者の症状別分類の割合と一致していた。

年齢別分類では0歳児546名16.0%, 1歳児485名14.2%, 2歳児428名12.5%, 3歳児413名12.1%, 4歳児421名12.3%, 5歳児253名7.4%, 6歳児181名5.3%, 7歳児以上695名20.3%という内訳であった。受診者の年齢別構成の特徴では、6歳以下の乳幼児の受診割合をみると、0歳児の占める割合が最も多く、4歳児までの受診者数は各年齢で400名を超え、3歳児以下の子どもの受診率は小児の救急外来受診者全体の半数(55.6%)を占めていた。

IV. 考 察

本調査の結果、小児の救急外来受診者の割合は通常時間内における小児科外来受診者の割合に比して3倍近い数値を示し、重症度においては軽症受診が全体の8割弱を占めていた。この傾向は各地の基幹病院が報告する内容^{6)~8)}と一致するものであり、現代の若い親世代の受診行動を反映している。また、受診者の主訴は発熱が最も多く、症状別受診率では約半数が発熱であることから、発熱に対して恐怖心を抱く親が多いという報告^{9)~12)}とも一致する。これらの結果から、発熱温度や子どもの状態を考慮した受診というよりも、親の不安感が優先されたものと推測される。その背景には乏しい育児知識と経験、それらに基づく家庭看護力の低さから病児に対する不安を増強させている親の心情が推察される。

近年、軽症の救急外来受診者数の増加は社会問題化してきている¹³⁾ものの、単に批判して解決するものではなく、親への健康(患者)教育と育児能力の養成が必要^{4), 14), 15)}である。すなわち、看護職による病児の観察と判断の目安、状態に応じた具体的対処方法の指導は、直面する不安の軽減と育児への自信をもたらす関わりにつながる重要な看護支援と思われる。

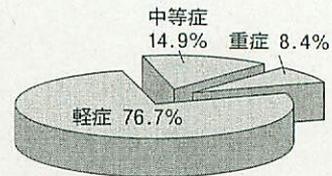


図4 小児の救急外来受診者重症度別分類

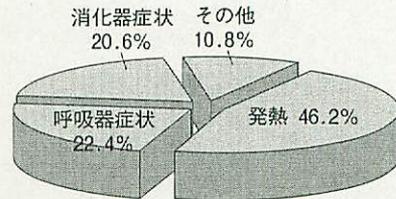


図5 小児の救急外来受診者症状別分類

V. ま と め

A市立総合病院における小児の救急外来受診者の特徴は、通常時間内における外来受診者数に比して3倍近い増加傾向を示し、重症度別では軽症が全体の8割、主訴では発熱症状が最も多く、症状別では発熱が全体の5割、年齢別では3歳以下が全体の6割を占めるという現状が明らかになった。この背景には、親のもつ育児知識と経験の乏しさからくる発熱への恐怖心や家庭看護力の低さなどが考えられ、病児に対する不安を強める親の多いことが示唆された。

引用文献

- 1) 小田滋: 小児救急医療: その実像と虚像—本質を見直す—, 小児保健研究, 64(5), p. 660-668, 2005.
- 2) 田中哲郎: 小児救急医療の現状, クリニカル プラクティス, 23(2), p. 1228-1232, 2004.
- 3) 大谷武司・西川慶繁・中山良子: 小児救急医療の現状, 東京小児科医会報, 15(2), p. 17-22, 1996.
- 4) 石井博子・田中哲郎・市川光太郎, 他: 母親の疾病の理解度および看護力, 小児科臨床, 55(7), p. 1511-1516, 2002.
- 5) 松倉裕喜: 救急外来の80%は時間外診療が目的, 済世, 81(6), p. 23-25, 2005.
- 6) 田原悌・橋本光司・大久保修, 他: 小児科救急患者数の変遷と初期救急輪番制の検討, 小児保健研究, 60(5), p. 625-629, 2001.
- 7) 宇加江進・吉田雅喜・菅沼隆, 他: 当院における小児時間外救急の現状と問題点, 日本病院会雑誌, 48(12), p. 1915-1918, 2001.
- 8) 渡部誠一・中澤誠・衛藤義勝, 他: 小児救急外来受診における患者家族のニーズ, 日本小児科学会雑誌, 110(5), p. 696-702, 2006.
- 9) Crocetti M., Moghbeli N., Serwint J.: Fever phobia revisited: Have parental misconceptions about fever changed in 20 years?, Pediatrics, 107(6), p. 1241-1246, 2001.
- 10) 梶山瑞隆: 保護者の小児救急医療に対する意識調査, 日本小児救急医学会雑誌, 1(1), p. 121-129, 2002.
- 11) 細野恵子・岩元純: 発熱児に対する母親の認知と対処行動—1089名の母親の現状分析—, 小児保健研究, 65(4), p.

- 562-568, 2006.
- 12) 太田理恵・小田滋・氏家良人, 他: 小児の発熱に対する母親の認識とその関連要因, 小児保健研究, 66(1), p. 22-27, 2007.
 - 13) 田中哲郎: 小児救急が問題となる社会的背景, 日医雑誌, 134(5), p. 793-796, 2005.
 - 14) 市川光太郎・山田至康・田中哲郎: わが国の小児救急医療の現状と問題点, 小児保健研究, 60(5), p. 611-620, 2001.
 - 15) 田中哲郎・石井博子・向井由紀子, 他: 子どもの疾病に関する保護者の理解度, 小児科臨床, 54(1), p. 96-102, 2001.